

人生と苦杯

若き日、それは人生の朝である。朝が一日中でも一番大切な時であるように、若い日は人生で一番貴重な時である。だが若い人は、それだけ、若い時を貴重なものと思っているであろうか。

若い日が過ぎ去った時、どれだけ若い日が大切なものであったか知れるであろう。若い日には相当、真剣に生きた気でも、過ぎて見ると足らなかったことがわかる。そうした悔いを持つ者は私一人であろうか。

若人よ。どうか真剣に歩んでくれと、切念せずにはいられない。病に悩んだ者でなければ、病のよくなる時のよろこびは、わからない。

人生の暗さ、人の世のはかなさを知った者でなければ、人の世に対して深い愛を抱くことは出来ない。

甘い歓楽の酒の盛られてあつた盃、その盃の中には何時しかに、苦い涙が盛られてある。

その苦い涙を飲むより外に、絶対に生き方がない。それが人の世のほんとうの相ではあるまいか。

逃げてみかくれても、どうしても飲まされる苦い酒、それを持つたまゝで困っている人。どうしたらいいのであろう。

その時になつて人生の歩み方が二つになる。

苦い酒を飲むまいとする。それは人間に与えられた本能である。だが、それとはちがつて別の心を持つのも人間である。この二つの心が戦つたのち、一つの道が見出されるであろう。

イエス・キリストが十字架にかけられる前夜、ゲッセマネに入つてただ独り、神に所つた心、

「父よ爾においては凡ての事、能はざるなし。この杯を我より取りたまへ。然れど我が欲ふ所を成さんとするにはあらず、爾が欲う所に任せたまえ。」

前には、恐るべき十字架という苦い杯が待っている。その杯をもつて二つの心がおこる。キリストの心はよくわかる気がする。

やがて、苦い杯を、素直に、静かに受け取る心がおきた時、その彼方には、深い愛と、黎明が待っているよう。

受け取るまい、飲むまいとして、騒々しく逃げまわる時、ついにその苦い味さえ、ほんとうにはわからず、更にもつと大きな混乱と、悪い状態がおきてきて、そこに何ものをも見出さないうで人生が去つてしまふだらう。苦い酒を飲むまいとする人間の態度によつては、苦い涙の事実が解決されはしない。

杯を手にしたままで、じつと考えて見るがいい。

今世界の一切の人間が大きな苦い杯を持たされている。その苦しみが、手のひらをかえすような方法で簡単に解決されないことが、いよく知らされて来た。特に、杯を

他人にもたせて、自分だけよいことをしようとする世界各国の態度によつては、ますます苦しみを深くすることを知らさしめた。そして明日にもすぐ解決してやるような言葉が全て一片のそらごとであつたことがわかつた。

苦しみが共同の苦しみとなつた時、そこから深い人間愛が生れる。

父親の貧しさを知りつくす時、子供はじつとしていられない。恐らくほんとうの孝行人は、工場で働いている女工さんたちの中にあるのではあるまいか。

一家、一団体、一社会、一国が共同の苦しみを苦しみとする時、はじめて、自分自身を救う道がわかつて来よう。

仏は無我をお説きになつた。無我の心は、ほんとうに苦い杯を飲み乾す心である。

仏心とは、一切衆生の苦い杯を一人で飲み乾さうとなさる心である。

正しいみ教を聞こうではないか。ほんとうにみ教を聞いて、合掌して苦しい杯を飲みほすことが出来る日に、無我は我等によつて、実証される。

如何に受け取るまいとしても、手に渡された杯は必ず飲まされるのだから。丁度、死はもがいて逃げてでも受け取らねばならぬように。

若い日に流した汗の量、苦い杯を持った量の多少は、その人の晩年になつた時の美しい華の多少に關係をもつ。

若い人よ。無我の実践者になれ。苦杯をさけるなかれ。